

いろいろな体験教室

参加費無料

● 勾玉・耳飾り作り教室

縄文人が身に着けていた勾玉や耳飾りを参考に、滑石という軟らかい石を削って、オリジナルの縄文アクセサリーを作ります。石は磨けば磨くほどきれいに光ります。



● 縄文土器作り教室



発掘された土器を手本に縄文土器を作ります。2日間かけて製作し（親子教室の製作は1日）、約1カ月乾燥させた後、遺跡庭園内で野焼きを行います。

● 縄文の糸作り教室

縄文時代は主に植物の繊維から糸や縄を作っていました。教室では、「カラムシ（苧麻）」という植物から繊維を取り出し、撚って糸を作ります。



● 古代の布作り教室



編布編みは縄文時代から受け継がれてきた布を編む技法と考えられています。体験教室では、オリジナルの作業台を使って麻紐から編布をつくります。

● トンボ玉作り教室

日本のガラス玉製作の歴史は弥生時代に始まります。ガラスの棒を溶かして、軸に巻きつける方法で、オリジナルのトンボ玉を作ります。



このほかにも様々な体験教室などを開催しています。詳しい内容や日程、申し込み方法などは、ホームページまたは案内チラシをご覧ください。

利用案内

開館時間 9:30から17:00まで※
※遺跡庭園「縄文の村」は11月から2月まで16:30閉園

休館日

- ・年末年始（12月29日から1月3日まで）
 - ・展示替えの臨時休館期間（3月初旬から中旬）
 - ・施設メンテナンスのための休館（不定期：年数回※）
- ※ 詳細な日程はホームページ等でご確認ください。

入館料 無料

アクセス

- ・京王相模原線「京王多摩センター」駅より徒歩5分
- ・小田急多摩線「小田急多摩センター」駅より徒歩5分
- ・多摩モノレール「多摩センター」駅より徒歩7分



連絡先
指定管理者



東京都埋蔵文化財センター

Tokyo Metropolitan Archaeological Center
〒206-0033 東京都多摩市落合 1-14-2
TEL 042-373-5296 FAX 042-374-2161

<https://www.tef.or.jp/maibun/> 東京都埋蔵文化財センター



検索

縄

文

の

風

に

の

つ

て

多摩ニュータウン遺跡群

稲城・多摩・八王子・町田の四市にまたがる、東西14km、南北2～4km、総面積3,000haという広大な面積を有する多摩ニュータウン。その丘陵内に約1,000箇所の遺跡が点在しています。

東京都埋蔵文化財センターでは、1966（昭和41）年から40年間かけて、290ha、770箇所の遺跡を発掘調査してきました。



展示ホールには、この多摩ニュータウン遺跡から出土した縄文土器などが数多く展示されており、いつでも自由に見学できます。



様々な展示と体験コーナー



東京都立埋蔵文化財調査センター
Tokyo Metropolitan Archaeological Research Center

遺跡庭園「縄文の村」

遺跡庭園「縄文の村」は、1987(昭和62)年、多摩ニュータウンNo.57遺跡を保存する目的で整備されました。No.57遺跡は、旧石器時代から中世にいたる複合遺跡ですが、縄文時代前期の住居跡2軒、中期の住居跡8軒、早期のおとし穴などが発掘され、縄文時代の集落跡であることがわかりました。

現在、No.57遺跡の南側の半分は、調査を終了した状態のまま盛り土をして「縄文の村」の地中に保存されています。

園内に復元された3棟の住居では、防虫・防腐をかねて週に数回ほど火焚きを行っており、運がよければ実際の火焚きが見学できます。このほか園内には、発掘時の状況を再現した住居跡の模型や、湧水などもあわせて再現し、「縄文の村」の景観を体感することができます。

A しきいし 敷石住居 (約4,500年前)



八王子市堀之内のNo.796遺跡で発見された住居を移築したものです。床に大きく平たい石が敷かれていることから、敷石住居と呼ばれており、およそ4,500年前の多摩地域の住居の特徴をよく示しています。室内の面積は約8㎡と少し小さめです。



B たてあな 前期前半の竪穴住居 (約6,500年前)



発掘調査当時の位置に復元された住居です。床の形が長辺7m、短辺4.5mの長方形で、室内の面積は約20㎡とやや広く、5~6人くらいは十分に住めたと考えられています。住居の棟の上には、屋根が浮き上がらないように土を盛って押さえ、さらにヒバなどが植えられています。

C 中期後半の竪穴住居 (約4,500年前)



鉄塔の東側で発見された住居をモデルに復元した住居です。壁沿いの5本の柱で屋根を支えており、床の形は長径5m、短径4mの楕円形で、室内の面積は約18㎡と、縄文時代中期の標準的な大きさの住居です。

縄文の森

遺跡庭園内には、約5,000年前に縄文の村の周囲に生えていたと考えられる樹木や野草を50種類以上植え、当時の森の様相を再現しています。

当時この地域には、シラカシを中心とした常緑広葉樹のほか、クヌギ、コナラ、トチノキ、クリ、クルミといった温帯落葉広葉樹や、カヤなどの針葉樹を交えた豊かな森が広がっていたと推定されています。

この縄文の森は、当時の人々にとって日々の食糧を得るための場所であると同時に、道具や住居の材料を得るための場所もあり、生活に密着した大切な森であったといえます。



現在は、この縄文の森で、縄文土器の野焼きや自然観察会など、さまざまな行事を行っています。

E わきみずあと 湧水跡



北斜面の小さな谷に湧水をためる小さな水場がつくられています。現在は水脈が切れて湧水は見られませんが、かつては、どんな日照りのときでも、枯れることはなかったようです。

きっと縄文人もこの水を利用していたことでしょう。

D 竪穴住居の模型



発掘調査後の住居跡に盛り土をして、竪穴住居2軒の調査当時の様子を模型で再現しました。中央には炉があり、まわりの柱が立っていたと思われるところには実際に短い柱をあしらってみました。